
銀月四重奏

しみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀月四重奏

【Nコード】

N1845E

【作者名】

しみちゃん

【あらすじ】

少女は恋をした。見ていただけで良かった。想うだけでよかった。しかし、いつしかその感情は歪んでしまった。

新月（前書き）

この話は、前作の『月のワルツ』の過去偏です。
多分、先に月のワルツを読んだ方が解りやすいかもしれません。

新月

確かな愛が、欲しい…。
名も無き少女は願った。

少女は、ある魔法使いの一族の子として生まれた。
しかし、その一族は女人禁制。
女に子を産ませると、その女を殺す。
子が女であれば、捨てる。
そういう家系であった。

少女は、ある奴隷商に拾われた。
毎日毎日、寝る間も無い程に少女は働いた。
そして、誰からも愛されず、人としてすら扱われなかった。
少女は、生きる事に絶望していた。

しかし、そんな少女がある日恋をした。
相手は、この国の王である『テイル』であった。
テイルは、齢14にして国を治める、何とも優秀な王であった。

少女はある日、主人に頼まれ、王城へワイン樽を運んだ。
奴隷と言えども、年端も行かぬ少女にワイン樽はとても重く、遂に
少女は転んでしまった。

しかし、奴隷である彼女を助ける者はだれも居なかった。

（何時ものことだ…）

そう思つて少女は立ち上がろうとした。
ふと、少女は足にひりひりとした痛みを感じた。
少女の膝からは、紅い血が流れていた。
少女は血を拭い、立とうとした、その時だった。

「大丈夫か？立てるか？」

頭上を仰ぐと、蒼い髪をした青年がいた。

整った顔に、左の額から頬にかけて奔る王家の紋章である刺青。その青年が、テイルであることは直ぐに解った。

「…大丈夫です…。」

少女は、ぶつきらばうに答えた。
その時だった。

「テイル様！！その様な者に手をお貸しするなど滅相もない！！」

テイルの付き人であろう、初老の男がテイルに言った。

「レヴィ。お前がそれを言う権利があるのか？この人も人、僕も人だ。人が人の手助けをして何が悪いんだ？言ってみる。」

「しかし…」

「しかし…何だ？」

「いえ、何でもありません。」

歯切れが悪そうに、レヴィは言った。

「退れ。」

テイルがそう言うと、レヴィは城の中へと消えた。

そして、テイルは『ふう…』と、溜息を吐き、少女の方へ振り返った。

「足、本当に大丈夫か？」

テイルは少女に聞いた。

少女の足からは、未だに血が流れ続けている。

テイルはポケットからハンカチを出し、少女の足へ巻いた。

「不恰好でゴメンな。」

少女は、何も言う事が出来なかった。

こんなに人に優しくされたのは、何時振りだろう？

いや、初めてだ。

少女は、その優しさに涙を流した。

テイルは何も言わず、そつと少女の頭を撫でた。

テイルは、近くに居た召使等にワイン樽を運ぶよう指示した。

「…すいません…」

少女がそう謝ると、テイルは言った。

「けが人に仕事させる訳にはいかないだろう？それに、あんな重いもの…此処まで運ぶのも辛かったろう。」

何でこの方は、こんなにも優しいのだろうか？

少女は思った。

奴隷の自分。

王であるテイル。

普通なら見向きもしないだろう。

けれど、テイルは自分を人として扱ってくれた。

少女は、それが途轍もなく嬉しかった。

「そろそろ行かないとな…。これ、あげるよ。」

テイルは、少女に鈴蘭を渡し、城へ消えた。

鈴蘭の花言葉は…『幸福が訪れる』

（私は…貴方に会えて幸福です…）

少女は、この日テイルに恋をした。
その日から、少女はずっとテイルを思い続けて来た。
アリスが現れるまでは…。

少女がアリスの事を聞いたのは、暫く前だった。
ある日、街で話していた事を偶然聞いたのだ。
アリスは、時を司り、そして操れるという事を。
少女はその力を、羨ましく思った。
自分の過去を変える事も…出来なくは無いかもしれない、だから。
そして、恨めしくも思った。
何故、アリスだけがそんな力を持っているのか。
何故、同じ人なのに、何故私はこのように辛く生きなければならぬのか。

逆恨みだった。
そして、少女はまたある事を聞いてしまった。
アリスとテイルは恋仲にあると…。

少女は、決意した。
自分は一応魔法使いの家系に生まれた。
この世界に魔法使いは沢山居る。
それらの弟子になり、魔法を学び、そして、この世界を支配する事を。
を。

そうすれば、何もかも思い通りだから…。
そして、アリスを殺し、時の力を奪う事を。

少女は、主人の家へ帰り、主人に言った。
「今日限り、この屋敷の奴隷を辞めます。」
しかし、当然主人はそれを許すわけなく、剣幕で怒鳴った。
「お前は私の所有物だ！！奴隷ごときが主人に楯突くんじゃねえ！

！」

少女は、隠していたナイフで、主人を刺した。
綺麗な刺繍が施されたカーペットに、ポツリポツリと紅い染みが出
来て行く。

少女はナイフを引き抜いた。

主人は『うつ』と言う呻きをあげ、倒れた。

少女は、倒れた主人をめった刺しにした。

真っ赤に染まるカーペット。

肉を切り裂き、血が飛び散る音。

原型を留めぬ主人。

やがて、主人は、只の肉塊となり、部屋は真っ赤になった。

少女は、残忍な笑みを浮かべ、肉塊に言った。

「ざまあみる…」

真っ赤な部屋の中、鈴蘭の白さが一段と映えていた。

時計の針が12時を回った頃、少女は屋敷を出、屋敷に火を点けた。
燃え盛る屋敷の中からは、少女以外の奴隷の叫び声がした。

少女は、町を去り、森へ来た。

噂では、この森に魔法使いが一人住んでいるという。
少女は、その魔法使いに弟子入りするつもりでいた。

森の中の一軒の小屋。

少女はその小屋の戸を叩いた。

「誰だ…。」

小屋の中から聞こえる、低い声。

少女は、返事を返した。

「貴方の弟子にしてください。」と…。

ギィ…と軋むドア。

小屋の中から、一人の老婆が出てきた。

小柄な体はすっぽりと黒いマントに包まれ、フードで顔は隠れている。

老婆の金色の眼だけが、異様な程に輝いていた。

少女はその瞳に一瞬怯むが、負けじともう一度老婆に言う。

「私を貴方の弟子にして下さい！」

老婆は、ふんと鼻を鳴らし、少女に言った。

「…お前…人を殺したな？」

何故？

何でこの人は私が人を殺したことを知っているの？

何で…？

沈黙が二人を巻き込む。

少女に緊張が奔り、冷や汗がこめかみを伝う。

沈黙を破ったのは、老婆だった。

「血の匂いが染み付いているぞ…。それに、憎しみがお前の心に渦巻いておる…。さもしいなあ…。…お前は、何の為に魔法を知りたいんだい？」

「この世界を支配する為です。」

少女は、はつきりと答えた。

全てを支配する力を得る為に…私はここへ来た。

「支配する…？お前からそんな大層な事、読み取れないがねえ…。」

老婆の言葉に、少女は押し黙るしか無かった。
黙って、何も答えない少女。
老婆は少女に言った。

「まあ良い。付いて来な…。」

老婆は森の、更に奥へと進んで行く。

少女はそれに続く。

幾分歩いた頃、目の前に現れたのは深い洞窟だった。

老婆は、洞窟の中へ進む。

蝙蝠が飛び交い、今にも蛇や虫が出てきそうで、ジメジメとしたこの洞窟。

少女は怯んだが、意を決して洞窟へと進んだ。

コツン…コツン…

二人の足音が、洞窟内に木霊する。

足元には、鼠や獣の死骸や骨が散乱していた。

やがて、老婆は足を止めた。

老婆が立ち止まった先にあつたのは、大きな鏡だった。

「この鏡を覗いてみな…。」

老婆は、少女に言った。

言われるがままに、少女は鏡を覗き込んだ。

鏡に映ったのは、紛れも無い自分。

（こんな事して…一体何なの？）

少女がそう思った時だった。

『また女か…』

男の声がした。

此処には、私とこのお婆さんしか居ないはず…！

少女は、耳を疑った。

少女は、鏡に眼を見張った。

赤ん坊の、自分が居た…。

見間違えるはずなどない。

髪の色、髪の質、右腕にある痣の位置まで一緒なのだ。

オギヤア … オギヤア … と産声を上げる赤ん坊。

そして、その赤ん坊の産みの親が切り裂かれ、断末魔の叫びを上げる。

そして、傍に居た男は、赤ん坊を抱き上げて言う。

『また女か…』と。

男の目は、銀色に輝いていた。

もう一人の、金色の目の男が言った。

『どうする？』

『…捨てて来い』

そこで、鏡に映っていた風景は一変し、夜中の街中に変わった。

街の全てが眠りに就き、銀色の月明かりが街を照らしていた。

金色の目をした男は、赤ん坊の少女を抱き、橋の袂へ来た。

そして、そこらへんに落ちてあったダンボールを組み立て、少女を中に入れて、闇へと消えた。

いや…

これ以上見せないで…

イヤ…

お願いだから、やめて…

いや…イヤだ…これ以上見たくない…！！

少女の思いとは裏腹に、鏡の中の風景は変わって行く。

そして……少女の人生最悪と言える出来事が、鏡に映し出された。

三日月（前書き）

少し残酷な描写がある…力も？

三日月

少女の目に飛び込んだ映像。

少女の足元には、血溜まりと、細かく切り刻まれた死体。
そして…空に浮かぶ月を睨む男の首が二つ。

少女は、叫んだ。

咽が潰れる位に、血反吐を吐く程の大声で、叫んだ。
少女の叫び声が、洞窟に木霊する。

「イヤあああああああ！消して！！私の前から消えてえええええ！！！！」

頭を抱え、蹲る。

いや！！

何も見たくない！！！！

三日月が、綺麗だった。

沢山の星が夜空を飾り、其処だけ色を失ったかの様に、三日月が輝いていた。

静寂に包まれた夜の街。

その静寂を破る、魔法使い二人の悲鳴。

まだ幼い少女は、手に大刀を持っていた。
月明かりに照らされて、怪しく光る大刀。

少女は、大刀を、二人の魔法使いに向けて振り下ろした。

しかし、仮にも相手は魔法使い。

ひらりと少女の大刀をかわす。

しかし、それを少女は許さず。

少女は地を蹴り、空へと舞い上がると、魔法使いの一人の首を切り落とした。

そして、地に着くと、大刀を振り、もう一人の魔法使いの首を切り落とした。

そして、二人の首のない胴体を細かく切りつけた。

辺り一面は、紅く染まる。

月明かりに照らされた血は、とても綺麗な赤色をしていた。

少女は、目の前の光景を見てはつとした。

「…これ…何…？」

目の前に広がる血の海と、空を見上げる二つの生首。

少女は、何があったのかわからなかった。

自分の手には、血糊がべつたりと着いた大刀。

自分の服には、大量の返り血。

（もしかして…私がやったの…？）

少女は、自分のした事が解らなかった。

何故なら、少女は無意識にやってのけたからだ。

少女の意識は、あの時存在しなかったのだ。

少女は、手にしていた大刀を手放した。

カラン…と音を立てて地面に落ちる大刀。

少女は、震えていた。

自分が、人を殺めた事に対して恐怖した。
しかし、それと供に清々しいものがあつた。
それは、自分を捨てた親を殺す事で復讐できたからだった。

少女は、目を瞑った。

この二人を殺して清々しく思つたのは事実だった。
しかし、それは殺すまでの過程を見ていなかったからだ。
自分がこれ程までに残忍な殺し方をした事が信じられなかった。

「お前は弱い…。」

老婆は、蹲る少女に言った。

少女は、未だにガタガタと震えている。

「弱い者が、世界を支配できるか？…もう一度問う。お前は何の為に魔法を知ろうとする？」

「…私の思い通りにならない世界なんていらない…！！だから私はこの世界を支配するんだっ…！！」

「お前は…何も見えていない。お前に魔法を教える事は出来ない。帰れ…。」

少女の意識は、そこで途絶えた。

ワタシノオモイドオリニナライモノナンテイラナイ…

意識の無い少女は、老婆の首を掴み、壁に打ち付けた。

ドオン…と音が響き、ぱらぱらと天井から土埃が落ちてくる。

老婆はうめき声を上げ、少女の手を掴み、抵抗しようとするが、少女の力は途轍もなく強く、老婆の力では到底敵わなかった。

老婆は、魔法を使おうとした。

老婆の手は光っていたが、少女が手に力を込めた瞬間、老婆の手は光を失った。

「な…何故だ…」

老婆の顔に、困惑の色が浮かんだ。

しかし、そんな事など関係ないかの様に、少女は空いた片方の手の指を、老婆の目に食い込ませた。

少女は、指に力を入れて老婆の金の目を抉り出す。

老婆の悲痛な叫び声と、目を抉り取る音、滴る血が落ちる音が木霊する。

少女は老婆の両目を抉り出すと、その眼を飲み込んだ。

『魔法使いの魔力の源は、目にある』

少女が読んだある本に、そう書かれていた。

眼を奪い、飲み込む事で魔力が上がる事も知っていた。

眼を飲み込むと、少女は主人を殺したあのナイフで老婆を刺し殺した。

少女の目は、老婆と同じ金色に輝いていた。

少女は、鏡に向き直った。

鏡は相変わらず何か映していたけれど、今の少女には何の関係もなかった。

「ふん…下らない。」

ガシャン…

少女は鏡を叩き割ると、老婆の死体を見た。

「何と汚らしい姿だ……」

少女は、爪先で老婆を蹴ると洞窟を後にした。

洞窟を出ると、夜空にはダイヤモンドを散りばめた様に、燦然と星が輝いていた。

少女がパチンと指を鳴らすと、低い音を響かせながら洞窟が崩れていった。

[illegible]

狂気じみた少女の声が夜空に木霊した。

少女は、老婆の小屋を目指して歩いた。

老婆の小屋にたどり着くと、少女は糸が切れたかの様に床へ倒れた。

少女は、朝日が昇るとともに目覚めた。

血を零したかの様に紅い朝焼けが、少女の意識を覚醒させた。

（あれ……私昨日洞窟に行って……いつ帰ってきたんだっけ？）

少女に、昨日の記憶は無かった。

取り敢えず、少女は小屋を出る事にした。

自分が弟子になろうとした魔法使いが消えているのだ。

ここにいても、意味がない。

少女は、行くあてもなく只ひたすらに歩いた。

森は、進むに連れて段々と深くなって行く。

太陽が遠く感じる程、深く暗い森の中、少女の耳に泣き声が聞こえた。

泣き声がする方向へ少女は足を運ぶ。
其処に居たのは、黒い翼を生やした、銀系の髪をした、小さな女の子だった。

この子も…私と同じように独りなのかな？

「君は…こんな所で何してるの？」

少女は問いかけた。

「…捨てられた…。」

こんな小さな子が…。

少女は、あの鏡に映った、捨てられた自分を女の子に見た。

「君の名前は？」

「アリシア…。」

「アリシア…私に着いて来る？」

少女は、アリシアに手を伸べる。

「私を…裏切らない？」

少女は少し面食らった。

しかし、真っ直ぐな瞳で答えた。

「絶対に、絶対に裏切らない。」

アリシアは、少女の手をしっかりと握り、もう片方の空いた手で涙を拭った。

アリシアは、人形だった。

この世界で作られた、自我を持った人形。

アリシアは、人間の娯楽と役に立つ事だけを存在理由に作られた。アリシアは人の為に生きる、それだけで良かった。

なのに、捨てられたのだ。

とても理不尽だ。

少女はその事に腹を立てた。

何故…私達は普通に生きてはいけないのか？

悔しさに唇を噛んだ。

「アリシア…この世界に復讐しないか？」

あの少女はが、アリシアに問いかけた。

アリシアは真っ直ぐな瞳で、力強く頷いた。

「貴方の為なら何でもする。」

アリシアは少女に言った。

「私は、貴方に忠誠を誓います、女王…。」

今ここに、女王が誕生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1845e/>

銀月四重奏

2010年10月9日12時12分発行